

佐久近辺の美術批評 第10号 (2013年下半期号)

芸術一家の肖像 (桶田家・美齊津家)

高橋 重之 (画家を志す人)

小諸高原美術館で10月4日から10月20日まで開かれた桶田明夫、桶田洋明2人の父子洋画展を拝見しました。

父である明夫さんは、小諸市で生まれ信州大学教育学部を卒業され県内で教職に携わっておられました。息子の洋明さんは、父が居を構えた上田市で生まれ、筑波大学大学院修士課程芸術研究科を修了され、現在、鹿児島大学教育学部准教授をなさっています。

今回の父子展を見て、まず感じた事は、2人の個性が響き合っているという事です。世の中には仲の悪い親子が沢山いる中で、洋明さんは、父を尊敬し、明夫さんは、息子さんを自慢に思っているという事が、展覧会を見終わった後の気持ち良さにつながっていると思われまふ。この父子の凄い所は、2人とも甲乙をつけがたいほど才能に恵まれているという事です。父は、大胆で型にはまらない部分を見せているが、実は写実から離れずそのデッサン力も優れており、画面から凄まじいほどの生命の輝きを発光させている。息子は、控え目でおとなしい感じだが、その繊細さは群を抜いており、特に女性のエロスと死すら感じさせるほどの描写力は見事としか言いようがない。しかも、父親譲りの大胆さも兼ね備えており見る者を飽きさせない。

2人に共通する所は、海を感じさせるブルーを使うという所です。父は、日本海。特に名立での思い出が根底にあるようだ。若い女性の乗った木造の船は一体どこへ向かうのか、描写のポイントとして力を入れているという手と目線の行方から想像してみるのも楽しみだ。息子さんの近作の輪廻をテーマにしたシリーズは、海の中の世界を描いたのか、森の中を描いたのか、描かれている画面上での生命のバトンタッチから空想し、イメージを増幅させて見ていると、一種の宗教を感じさせる広がりのある世界に圧倒される。2人とも、ブルーの使い方は豊かで様々な輝きを、その深さと透明感の中に閉じ込めて、深い深い海の底から絶え間なく響いてくる潮騒の様に、心の奥底を揺さぶる魂の色だ。山国で育っているはずなのだが、海への憧れがこの様な作品を生んでいるのだろうか。

父は、息子の才能を小学生の頃に見抜いていたそうだが、ピカソの父が、ピカソの才能を見抜いた時の気持ちと、同じだったに違いない。あまり息子さんに絵を教えた事は無いそうだが、きっと父の作品を見て自然に感覚をみがいたのだろう、天性の能力を感じる。大学生の時に一生懸命絵を学んだ事が、その才を引き伸ばしたのだろう。山・川・池などを描いた明夫さんの、水彩や油彩の小作品も大変素晴らしく、高原の風の様子清々しく、美しい景色の中で深呼吸をした時のリラックスした気分になりました。その表現は若々しく、新鮮な空気と陽光が溢れている。洋明さんのアクリル、水彩の6号の作品群は、緻密な描写と大胆な省略のバランスが取れた、女性の滑らかな素肌を感じ、息使い、その香りまで感じさせる、完成度の高い最高の出来ばえです。

そして、もう1つ川上村文化センターで10月20日から10月25日まで開かれた「美齊津 経夫展—具象と抽象の狭間で—」を拝見しました。この展覧会も、経夫さんの作品と、母である千加代さん、息子の匠一さん、その妻のみゆきさんの3人の作品も飾られていました。母の千加代さんの作品は、線がきれいで緻密な描写をした上品な大変美しい作品で、とても素人の絵とは思えない程、レベルの高い美人画です。画家を志していたが、両親の反対もあり、その道を諦めたそうです。

経夫さんは、母の影響と高校時代の恩師・矢島 貞男さんの薦めもあり、武蔵野美術学校(現 大学)洋画科を卒業し、父親を亡くされた関係で長野県に戻り、教職に携わってきたそうです。今回の展覧会も、教師として最初に赴任した川上村で催されました。経夫さんの作品は、130号の大作から小さなものまで全部で34点。大画面の迫力のあるもの、若い頃描いた風景画、人形などが配置された静物画、モデルを描いた人物画など、バラエティーに富んだ構成で、主に具象から抽象へと向かう行程を描いたものです。その抽象画は、何層もの映像が映ったフィルムを重ね合わせて光を当てた時の様な、重厚で複雑なイメージを生み、画面上でダイナミックなムーブマンをおこし、一瞬の静止と連続を繰り返し、小宇宙に放りだされた様な無限の空間の広がりを感じ、きれいで落ち着いた色のある色彩が施され、美しいハーモニーを奏でている。

息子の匠一さん、妻のみゆきさんの2人共多摩美術大学を卒業されていて、作品のイメージも似通っていて、ポエティックな感じが印象的で、静かな温かみのある、部屋に飾ると幸福が訪れそうな気持ちの良い作品です。こうして家族が集合し、1つの空間に作品を飾ると、記念写真的な意味を持ち、一家にとって実りの多いものになったはずである。具象と抽象の狭間で揺れ動いていた美齊津先生は、抽象画を描く時も、デッサン・エスキース・下図と何度も試行錯誤を繰り返して仕上げていたが、最近では方向性を決めないで自由に描き進める事も多いようだ。そして、今後は少し半抽象的に、理解されやすい方向で、リアリティーも求めていくらしい。

先生の制作を振り返って見ていくと、今、先生が抱えている課題や向かっていく世界こそ、現在の美術界、特に、佐久地方の美術が進んでいく方向なのかもしれない。